

研究主題 学習指導要領に対応する国語科における評価と指導の在り方 ～ [確かな学力] をはぐくむための生徒による授業評価の活用～

I 主題設定の背景及び理由

本研究では、平成13年、14年の研究開発委員会が設定した評価規準の研究を踏まえながら、「生徒による授業評価」の活用を主題とし、[確かな学力]をはぐくみ、「伝え合う力」を育成するための授業改善を目指すことにした。

中央教育審議会答申（平成15年3月）では、学習指導要領の基本的なねらいである、生徒に「生きる力」をはぐくむことの重要性が確認されている。また、生きる力を知的な側面からとらえた[確かな学力]をはぐくむための課題が指摘され、具体的な改善の提言がなされた。答申では、「知識や技能に加え、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力までを含めた学力」と示されている。

確かに、現在の高校生を取り巻く環境を考えると、生徒に、様々な体験が不足しがちであり、豊かな人間関係を築いていくために必要な表現能力やコミュニケーション能力の育成が十分とは言えない。国語科の教室において、言語に関する関心や理解を深め、言語環境を整え、生徒の言語活動が豊かに行われているとは言えない現状である。

これらの状況から、21世紀の社会を担う若者が主体的・創造的に生き抜いていけるよう、生きる力を生徒に身に付けさせるとともに、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな心を育てること、自ら考え、行動し、表現できる力を身に付けさせること、思考力・判断力・表現力を含めた幅広い学力を向上させていくことが必要である。特に、国語科においては、「伝え合う力」をはぐくみ、さらにそれを、[確かな学力]の向上につなげていくことが課題となっている。

ところで、[確かな学力]の育成は、優れた授業実践によってもたらされる。また、優れた授業により生徒の学ぶ意欲は喚起される。よりよい授業づくりには、適切な評価を効果的に行うことが大切である。授業評価に生徒の視点を取り入れ、授業者が授業を振り返り評価することにより、授業者と生徒双方にとってよい授業をつくることができる。授業評価は、生徒においては自らの学習方法や学習の在り方を考え直す機会であり、授業者においては自らの授業改善を図る際の指標となるものである。授業者は、国語科の単元学習において、指導と評価の一体化を視野に入れることで、自らの指導過程を振り返り、単元目標の設定や指導方法について評価し、それを次の指導や授業計画に生かすよう努力する必要がある。

折しも、東京都では平成16年度から「生徒による授業評価」を実施することになった。それを見据えて、本研究では、生徒による授業評価を活用した授業改善、並びに評価項目の分析・検討を提示することにした。

II 主題解明の方法

[確かな学力]を育成する基盤となるのは、国語力の中でも、特に「伝え合う力」であると考え、「伝え合う力」を、コミュニケーション能力、豊かな言語表現能力、理解を深め心情を豊かにすることととらえた。本研究では、生徒の「伝え合う力」を高めるために、第1に多様な言語表現活動の場を設定した。第2にその中で場に応じた言語表現能力の育成を図るようにした。第3に学習活動において課題発見・問題解決能力の育成に結びつく形態を考察した。さらに問題を解決しようとする創造的な思考力を伸ばすために、情報活用能力の育成や読書指導を特に意識した学習活動も積極的に取り入れるよう工夫した。具体的には、

様々な言語活動を通して総合的な国語力を身に付けることを目指して、今回、学習指導要領に新たな必修科目として設定された「国語総合」を取り上げた。そして、その3つの指導内容である「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」を柱に据えて研究を進めることにした。「話すこと・聞くこと」の領域では「プレゼンテーションによりコミュニケーション能力を育てる」、書くことの領域では「子ども向けの説話を書くことにより豊かな言語表現能力を育てる」、読むことの領域では「脚本化することにより作品の読みを深め、心情を豊かにする」といった単元を設定した。

「プレゼンテーションによりコミュニケーション能力を育てる」では、社会人として必要とされる言語能力の基礎を育成することを目指した。そのため、実社会で近年しばしば用いられている手法を活用し、自主教材として編成した。身の回りの事柄から自分なりの課題意識によって、様々な問題を発見し、多面的に検討を行う能力を身に付けるため、書物、新聞、インターネットなどのメディアを活用するようにした。さらに、多くの情報を適切に取捨選択する力も身に付けられるよう配慮した。

「子ども向けの説話を書くことにより豊かな言語能力を育てる」では、相手や目的にふさわしい題材や表現方法を選んで書くことを主眼にした。説話を創作するためには自分の心情、思いを書き込むことが必要となる。さらに、「子ども向け」という設定は、読み手にふさわしい用語の選択能力を身に付けさせることをも配慮したものである。

「脚本化することにより作品の読みを深め、心情を豊かにする」では、作品に描かれた人物の考え方、生き方、心情を脚本化することで、生徒自身の豊かな感性を養っていくことを目指した。同時に古典の世界や言葉の美しさといった言語文化への親しみと理解を深めていくことが、生徒自ら取り組む学習活動によって可能であると考えた。

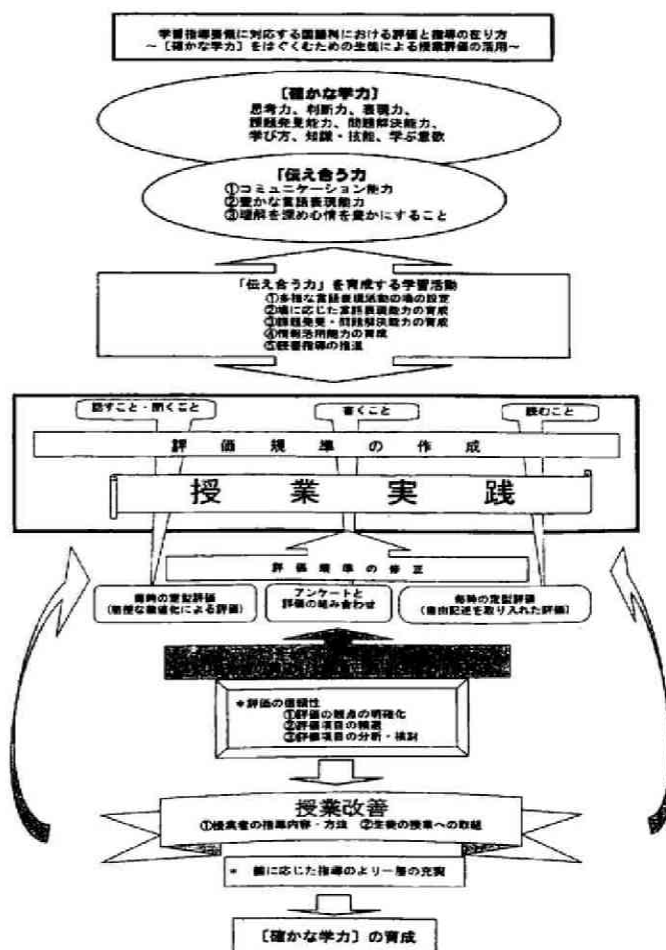
これら3領域の学習活動は、明確に聞き手や読み手を想定し、その受け手の反応をも視野に入れた、体験を通して「伝え合う力」の向上を目指すものである。

また、指導計画とともに評価計画においても、生徒の学ぶ意欲を引き出すことを共通のねらいとし、生徒による授業評価を最大限活用して、授業改善を図ることにした。評価の信頼性を高めるために、まず生徒に学習活動における目標とその評価の観点を明確に示した。その際、評価項目も精選した。そして、授業改善が時を置かずになされるよう、評価の集約、分析、検討がしやすい評価シートを作成した。

「毎時の定型評価」によって、短時間で評価を行い、その結果を次回の授業改善につなげることができる。「アンケートと評価の組み合わせ」は、生徒の実態把握を基に[確かな学力]の向上を図り、段階に応じた授業改善に役立てるものである。

以上のとおり、今年度は、生徒による授業評価を活用する評価システムの研究開発を行い、[確かな学力]の育成に努めた。

Ⅲ 研究構想図



IV 指導の実際

1 生徒による授業評価を生かした「話すこと・聞くこと」の学習指導（国語総合）

(1) 単元名 プレゼンテーションによりコミュニケーション能力を育てる

(2) 教材 自主編成教材

(3) 単元設定の理由

多種多様の情報が氾濫する現在、情報の収集、分析、発信、受信といった、情報活用能力が求められる。学習指導要領においても、音声言語に関する「話すこと・聞くこと」の配当時間が15単位時間程度と明示された。そこで、1学期「1対1の会話練習と聞き取りテスト」、2学期「1対多のスピーチと会議」、3学期「相互コミュニケーションを基盤とした説明、説得、質疑応答による学校版プレゼンテーション」を行うという年間授業計画を立て、プレゼンテーションを「話すこと・聞くこと」の学習活動の集大成と位置付けた。

プレゼンテーションは、当初、広告案を顧客に提案し、説明・説得する広告業界の言葉として用いられることが多かったが、次第に自分のもつ企画内容、製品、技術等に関し、限られた時間、一定の場所で正しく効率的に伝える発想、構成、発表の技術として使われることが多くなってきた。プレゼンテーションでは、聴衆が提案を聞き、提案に対する質疑応答までが一連の流れとなっている。本研究では、「話す・聞く」の両活動を「伝え合う力」の育成において重視し、プレゼンテーションを通してコミュニケーション能力を育成できると考え、本単元を設定した。

(4) 単元の目標

- ア 相手や場に応じて話す・聞く能力を高める。
- イ 問題について、自分の考えを効果的に話し、相手の伝えたい内容を的確に聞き取る力を身に付ける。
- ウ 相手を尊重する態度で、話し、聞くことにより、豊かなコミュニケーションを確立する。
- エ 評価活動を通して、自己の言語能力の向上を図る。

(5) 指導上の工夫

- ア 授業では、プレゼンテーションのテーマを、2つ用意した。クラス内において同一テーマで競い合うとともに、他のテーマと比較検討することができるようにした。
テーマ1「学校クリーン化に向けた取組」 テーマ2「学校図書館利用率向上に向けた取組」
- イ 主体的に授業に取り組み、自己の学習状況を的確に把握するため、毎時の定型評価を行う。
- ウ 精選された質問項目と簡便な数値化による短時間の定型評価で、即時に集計、分析を行い、授業改善に活用する。

(6) 指導計画（6時間扱い）

国語総合（第1学年）

	学 習 活 動	評価規準及び 学習指導要領に基づく指導内容	指 導 上 の 留 意 点
第 時	1 プレゼンテーションについての説明を聞き、理解する。	1 プレゼンテーションについて理解し、関心・意欲を高めている。	1 ①ビデオ、ワークシートを活用して、プレゼンテーションについて理解させる。 2 ①企画書モデルに基づいて、書き方を理解させる。 3 ①発表時間は1班につき7分、質疑応答を5分とする。 3 ②情報収集の仕方について紹介し、次回までに調べておくように指示する。 3 ③情報についての信頼性・必要性等を分析させる。
	2 企画書モデルを見て、企画書の書き方を理解する。	2 企画書の書き方について理解している。	
	3 クラスを6班に分け、班ごとにテーマを選ぶ。		
第 時	1 各班ごとに、テーマに対する情報収集、分析を行い、企画書を作成	1 ①的確な情報収集、分析をしている。(Cのアイエ Aのアイウ)	1 視聴覚に訴える資料（新聞記事、試作品、実物見本、OHP、パソコン映像等）の活用を促し、次回までに検討させる。

2時	する。 2 役割分担を決める。 3 質疑応答の準備を行う。	1 ②簡潔、明確な企画書を作成している。 (Bのアイウ)	書く	2 全員が発言者になるように指示する。 3 予想される質問と回答を考える。
第3時	1 企画書を基に、リハーサルを行う。 2 改善点をリハーサル評価シートに記入する。	1 音声言語の特質を踏まえ、適切な技術、態度で、リハーサルを行っている。(Aのア) 2 よかったところ、改善を要するところを把握している。(言のア)	話す聞く 知照理解	1 評価シートにより、評価の観点を明確にする。 2 次回までの、改善点の対策を指示する。
第4時	テーマ1に関して 1 3班がプレゼンテーションを行う。 2 質疑応答を行う。 3 評価を行う。	1 リハーサルでの改善点の対策を講じている。(Aのア) 2 ①的確に聞き取っている。(Aのイ) 2 ②積極的に質疑応答に参加している。(Aのイウ) 3 的確な評価を行っている。(AのイBのイ)	話す聞く 話す聞く 関心意欲 話す聞く 関心意欲 話す聞く	1 ①教室の隅々にまで声が届くよう指示する。 1 ②各班のプレゼンテーションをVTRで録画する。 3 プレゼンターの自己評価、聞き手の他者評価、毎時の定型評価を行わせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">毎時の定型評価(例) 4段階評価 下記参照 ①授業の目標がはっきり示されたか。 ②学習活動はよくできたか。 ③授業に意欲的に取り組めたか。 ④的確な話し方や聞き方ができたか。</div>
第5時 テーマ2に関して、第4時と同内容の授業を行う。				
第6時	1 評価シートを基に、プレゼンテーション活動の評価の集約・分析を行う。 2 1年間の話すこと・聞くことの学習活動を振り返る。	1 評価の集約・分析を通して、成果と今後の課題を把握している。(Aのアイウ Cのアエ) 2 1年間の話すこと・聞くことの学習活動で向上した言語能力、今後の課題を自覚している。(Aのア Bのイ)	関心意欲 話す聞く 関心意欲 話す聞く	1 評価の分析結果を踏まえて、VTRで録画した各班のプレゼンテーションを再生し、振り返りに活用する。 2 ①まとめた考えを発表させる。 2 ②学習活動の進まない生徒には、評価シートを基に、個別指導を行う。

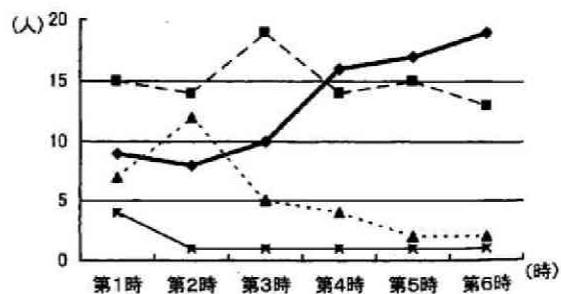
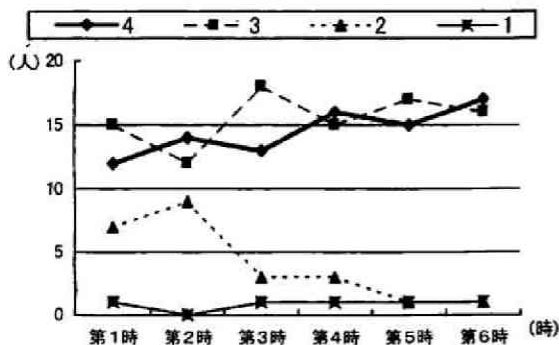
学習指導要領に基づく指導内容「A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと 及び言語事項」を()内に記載した。
学習活動の番号に評価規準及び学習指導要領に基づく指導内容と指導上の留意点の番号が対応している。

(7) 成果と課題

*毎時の定型評価の結果と分析(4そう思う、3だいたいそう思う、2あまり思わない、1全く思わないの4段階評価) 対象人数35人

③授業に意欲的に取り組めたか。

④的確な話し方・聞き方ができたか。



分析1 授業が進むにつれて生徒の発言が増えていき、授業が活発になっていった。それと同時に、生徒の評価の数値も高くなっていく。

*プレゼンテーションにおけるプレゼンターの自己評価と聞き手の他者評価（各12点満点、総合36点満点）

プレゼンター 自己評価				聞き手 他者評価				
6班		自分	6班平均	1班平均	2班平均	3班平均	4班平均	5班平均
学校図書館	企画案	9	10.2	10.1	8.0	11.4	9.8	9.6
利用率向上	音声技術	11	11.3	11.3	10.2	10.6	9.8	10.0
に向けた	態度	9	10.8	10.7	8.5	10.8	9.3	8.4
取組	総合	29	32.3	32.1	26.7	32.8	28.8	28.0

分析2 プレゼンター班の自己評価と、聞き手班の他者評価を合わせることで、評価の客観性が生まれる。全体的に音声技術、企画案の評価が高いことから、企画書の内容の充実を図りながら、話すこと・聞くことの学習活動を行ったことがうかがえる。

ア 成果

- (ア) プレゼンテーションという新しい学習活動で毎時の定型評価を行うことにより、生徒は1時間の学習活動に目的意識をもって取り組み、意欲が高まった。授業者は、毎時の定型評価により生徒一人一人の学習状況を細かく把握でき、個に応じた指導に取り組むことができた。
- (イ) 的確な話し方聞き方については、数値的評価が難しいが、プレゼンターの言語能力の自己評価と聞き手の他者評価を合わせることで、プレゼンターが客観的に自己の言語能力を認識することにつながった。
- (ウ) テーマについて情報を収集、分析する中で、社会的な視野が広がり、活発な話し合いが行われた。そのことにより、生徒同士の様々なコミュニケーションが行われ、豊かな人間関係の形成に寄与する契機となった。
- (エ) 1年次にふさわしい年間指導計画の中で、話すこと・聞くことの指導と評価を行ったことにより、生徒は話すこと・聞くことの難しさを自覚するとともに、音声技術を高めることができた。

イ 課題

- (ア) プレゼンテーション実施の第4時・第5時は、毎時の定型評価のほかに、プレゼンターとしての自己評価、聞き手としての他者評価があり、その三者の関連性を明確に意識しなければならない。
- (イ) 話すこと・聞くことの指導と評価に関して、高等学校の教育課程全体を通しての系統性を重んじた指導及び評価を行うことが課題である。
- (ウ) 適切なコミュニケーションは望ましい人間関係を築く上で不可欠である。今後の授業においても、他者への共感的理解、対話を通して問題解決を図る学習活動の中で、コミュニケーション能力を育成することを意識的に行う必要がある。

2 生徒による授業評価を生かした「書くこと」の学習指導（国語総合）

- (1) 単元名 子ども向けの説話を書くことにより豊かな言語表現能力を育てる
- (2) 教材 『十訓抄』より「大納言行成卿と実方中将と口論のこと」
- (3) 単元設定の理由

学習指導要領解説国語編には〈作文〉を「書くこと」に改めたのは、新しい領域構成の「B 書くこと」に対応して、これまでの生活文や読書感想文中心の指導から、それらを含めつつも、書くことの学習に一層の広がりを持たせようとするため」とある。そこで、本研究では、単なる読書感想文ではなく、相手や目的に応じて題材を選び、個々の考えを自分の言葉で書くことの指導を目指した。

優れた古典作品の説話を教材として読んだ上で、子ども向けの説話を創作することは、相手や場に応じた豊かな言語表現能力を育成する効果的な取組になると考えた。さらに、自分が置かれた状況以外の場を設定することで、状況把握のための情報活用能力や課題発見能力の育成につながると考えた。

また、高校生は子どもに比べて言語知識や生活・社会経験等が豊富である。そのことを生かして積極的な学習活動を展開させたいと考え単元を設定した。

(4) 単元の目標

- ア 相手や目的に応じて題材を選び、効果的な表現を工夫して書く力を身に付ける。
- イ 優れた表現に接し、自分の表現に役立てる。
- ウ 作品を書くことや読むことを通して、説話の本質や組み立てを理解し、思考力を伸長させる。また、先人の教訓に触れることで心情を豊かにし、自己の表現を豊かにする。
- エ 生徒が授業を評価することにより、生徒自身の授業への参加意識を高める。

(5) 指導上の工夫

- ア 教材の読み取りには補助プリントを用いることにより、読解に偏ることなく生徒の学習活動を書くことに集中させる。
- イ 調べ学習や創作を取り入れ、完成作品の相互評価や自己評価を行う。
- ウ 授業評価によって、単元の目標やねらいを生徒が十分理解することができたか確認し、授業改善に生かす。

(6) 指導計画(4時間扱い)

国語総合 (第1学年)

	学 習 活 動	評価規準及び 学習指導要領に基づく指導内容	指導上の留意点
第 1 時	1 教材プリントを音読する。本文通釈を行う。	1 ①自ら進んでプリントの解答を完成している。(Cのイ)	1 簡潔に通釈ができるようにする。辞書を引く学習を通して自ら学ぶ姿勢を大切にすることを説明する。また、時代背景、古典知識を授業者が補う。 2 説話をキーワードとして調べ学習をする。生徒の実態に応じて、参考資料などを明示し、調べ方を指導する。学校や地域の公立図書館の資料などを示す。
	2 家庭学習として説話についての調べ学習をする。	1 ②古文の優れた表現に触れる。(Bのウ)	
第 2 時	1 復習として、前回の話の内容を振り返りながら、話の全体像をつかむ。	1 古文の優れた表現に触れる。(Bのウ)	1 古文の表現の特徴、気付いた点をノートにまとめるように指示する。 2 ①生徒が調べてきたことを尊重しながら、説話の組み立てが理解できるようにする。 2 ②生徒の実態に応じて、生徒の発表だけでなく授業者の方で資料をあらかじめ用意する。レポートは後日提出させる。次回子ども向けに現代語で説話を創作することを予告し、構想をある程度考えておくことを指示する。 3 授業評価とあわせて、書くことの学習経験についてのアンケートを行う。
	2 調べてきたことを発表し説話の組み立てや本質を理解する。	2 調べ学習により、説話の構造を理解している。	
	3 生徒による授業評価及びアンケートを行う。		
第 3 時	1 授業評価の結果を受け、単元のねらいを確認する。	1 説話の本質を理解している。(Cのイ)	2 ①子どもが読み手であることを意識させ、表現に工夫するなど、生徒自身の独自性を大切に。自分の表現したいと思っている内容を明確にする。 2 ②特に人権に配慮し内容は他人を傷つけたり、むやみに批判したりするものでないよう注意する。 3 説話の意義を振り返り、 ^{ことわざ} 諺などを例に挙げ、短いものや教訓話でもよいので、完成させるように促す。
	2 子ども向けの説話を書く。	2 ①説話という題材を押さえている。(Bのア)	
	3 次時までには説話を完成させる。	2 ②限られた対象をしっかりとらえている。(Bのア) 2 ③主体的に書いている。(Bのア)	
第 4 時	1 前時で書いた説話を発表する。 2 発表を聞いた後で評価し合う。	1 自分の表現で書いている。	1 発表では数名に叙述に即して朗読させる。 2 相互評価の基準を明確にする。

第 4 時	3 相互評価を生かして、自分の作品を自己評価する。	(Bのウ)			3 評価シートを作成する。									
	4 本授業の授業評価を行う。	2 ①説話を書くこと の条件を理解して評価している。	関心 意欲 態度	書く	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">第2時アンケートの結果（一部抜粋）</p> <p style="text-align: center;">小中学校時における「書くこと」の授業について</p> <p>「書くこと」が国語の授業の中で時間をとって行われていた。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td>はい</td> <td>56名</td> <td>53.3%</td> </tr> <tr> <td>いいえ</td> <td>25名</td> <td>23.8%</td> </tr> <tr> <td>覚えていない</td> <td>24名</td> <td>22.9%</td> </tr> </table> <p style="text-align: center;">※約半数に「書くこと」の指導の定着が見られない。</p> </div>	はい	56名	53.3%	いいえ	25名	23.8%	覚えていない	24名	22.9%
		はい	56名	53.3%										
		いいえ	25名	23.8%										
覚えていない	24名	22.9%												
(Bのイ)	3 作品を客観的にとらえている。	関心 意欲 態度	書く											
(Cのア)	4 積極的に授業に参加して授業評価を行っている。	関心 意欲 態度	書く											

学習指導要領に基づく指導内容「A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと 及び言語事項」を（ ）内に記載した。学習活動の番号に評価規準及び学習指導要領に基づく指導内容と指導上の留意点の番号が対応している。

(7) 成果

ア 成果

- (ア) 生徒一人一人に対応できるように、段階に応じた指導の留意点を考えたことによって、生徒の授業への取組が向上した。
- (イ) 書くことを、作文や感想文から発展させ、対象を明確にするとともに、書き方の基本を学習したこと、また一人一人が独自性をもって表現するようにしたことから、書くことへの関心・意欲・態度が高まり、書く力が身に付いた。
- (ウ) 子どもを対象にして説話を書くことに、生徒は意欲的に取り組んだ。対象について「年齢をどのくらいに設定すればよいか」「子どもの知っている言葉はどんなものか」など、進んで子どもを理解しようとし、説話の教訓として他人を思いやる気持ちなどを盛り込んで創作をした。

イ 課題

- (ア) 生徒の実態に即し、個に応じた授業を行うことによって、生徒一人一人の取組は向上するが、さらに他の生徒の優れた発表や取組を共有することで、学習意欲の一層の向上を図ることが課題である。
- (イ) 生徒による授業評価と単元目標達成の評価の観点との関連性を明確にし、生徒による授業評価が生徒の単元目標達成に直結し、授業改善に生きるよう評価項目を作成することが課題である。

3 生徒による授業評価を生かした「読むこと」の学習指導（国語総合）

- (1) 単元名 脚本化することにより作品の読みを深め、心情を豊かにする
- (2) 教材 『平家物語』より「足摺」
- (3) 単元設定の理由

学習指導要領では「読むこと」の内容の取扱いで、「文章を読み深めるため、音読や朗読などを取り入れること」を挙げている。本研究では、親しみやすく基本的な作品である『平家物語』を生徒自身の言葉で現代語に脚本化し、人物や背景について理解させるとともに、実際に音声言語として心情豊かに語り合うことで音読・朗読指導を発展させて、作品への読みを深める試みをした。

声に出された言語が読み手から聞き手に伝えられていくときに生まれる感情の響き合いや、言語の響きを音として味わう体験を通して、言葉の力を感じさせ、「伝え合う力」に着目させる。さらにそこから作品世界のもつ広がりを感じ、作品が享受されてきた背景を理解するとともに、自ら学ぶ意欲を高めることができる。また脚本化にあたって、学校図書館等を利用して必要な情報を収集、選択する能力を養い、読書の習慣を身に付けさせることも目指して単元を設定した。

(4) 単元の目標

- ア 脚本化することにより、作品に描かれた人物の心情や生き方に対する理解を深める。

- イ 生徒自身の言葉による現代語訳の作成を通して読みを深める。
- ウ 作品を読んで感じたことや考えたことを文章にまとめることを通して、表現能力を高める。
- エ 図書館を活用し資料収集する力を身に付けるとともに、読書への関心を高める。
- オ 授業評価を通じて自らの学習への取組姿勢を振り返る。

(5) 指導上の工夫

- ア 脚本化するために主体的に読むことで、作品への理解が深まるようにする。
- イ 発表する機会を設定し、的確に伝え、聞き取る力が身に付くようにする。
- ウ 定型評価と自由記述を用いた授業評価によって授業を改善する。
- エ 全員が役割をもって、協力できるよう班活動を取り入れる。
- オ 平家琵琶の演奏を聴かせ、口承文学の世界に触れさせる。

(6) 指導計画 (6時間扱い)

国語総合 (第1学年)

	学 習 活 動	評価規準及び学習指導要領に基づく指導内容	指 導 上 の 留 意 点
第1時	1 単元の目標や学習方法を理解する。 2 班学習による調べ学習 (語句の意味、基本的な文法事項、現代語訳) を行う。	1 目標や学習方法を理解している。 2 ①班学習に意欲的に取り組んでいる。 2 ②現代語と異なる語句の意味や基本的な文法を理解している。(言のエ)	2 ①あらかじめ班分け (5班) をしておく。 2 ②プリントは1班につき1枚とする。 2 ③学校司書と連携を図り、参考文献を準備しておいてもらう。 2 ④図書室で授業を行い、すぐに調べられるようにする。 2 ⑤文法事項についてはここでは細部にこだわりすぎないように配慮する。
第2時	1 全員で本文の音読をする。 2 プリントを基に班ごとに発表する。	2 ①語り物としての文体や表現技法の特徴 (音便やリズムなど) を理解している。(Cのイ) 2 ②発表方法を工夫している。 2 ③班員全員が意欲をもって取り組んでいる。 2 ④聞き手は発表内容を的確に理解している。	2 ①表現技法の特徴 (音便やリズムなど) に注意させる。 2 ②班員全員が何らかの形で声を出すように指示しておく。
第3時	1 班による発表を続ける。 2 班ごとに現代語による脚本化を行う。	1 評価規準は前時と同様である。 2 ①原文の内容を叙述に即して脚本化している。(Cのウ) 2 ②班学習で、自分の読みを深めている。 2 ③脚本化に関心、意欲をもって取り組んでいる。	1 指導上の留意点は前時と同様である。 2 ①伝えたいことが明確になるように脚本化することを指導する。 2 ②語り手、人物や場面の設定を明確にした脚本化を指示する。 2 ③発表時間は1班につき6分とする。 2 ④小道具等については必要以上にこだわらないように指示する。
第4時は第3時の2以降と同内容の授業を行う。			
第5時	1 班ごとに脚本に基づいて語る。 2 相互評価を行う。 3 自己評価を行う。	1 ①意欲をもって取り組んでいる。 1 ②台詞や演出方法を工夫している。 1 ③描かれた人物の心情を考えて効果的に語っている。(Aのイ) 2 脚本の要点や工夫をとらえている。	1 発表後に授業者からの簡単な講評を行う。 2、3 相互評価シート、自己評価シートは項目を精選して作成する。(自己評価シートについては下記に提示) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">自己評価の例 10ページ 例1参照</div>

		3 脚本化により自分の読みを深めている。	読む		
第6時	1 『平家物語』に関する様々な表現形式に触れる(平家琵琶、能など)。	1 様々な表現形式に触れ、作品の背景を理解している。	話す	加味	2 『平家物語』に関する書籍を紹介して読書指導を行う。
	2 『平家物語』に関する知識を得る。	2 読書への関心を高めている。(Cのエ)	聞く	加味	3 ①評価シートの集計結果は次回発表する。(授業評価シートについては下記に提示) 10ページ 例2参照
	3 評価を行う。	3 学習活動全体を振り返っている。	読む	加味	3 ②授業者から学習活動全体の講評を行う。

学習指導要領に基づく指導内容「A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと 及び言語事項」を()内に記載した。学習活動の番号に評価規準及び学習指導要領に基づく指導内容と指導上の留意点の番号が対応している。

* 脚本化に関する自己評価シート(例1)

項目	4	3	2	1
1 脚本化に関心意欲をもって取り組みましたか。	かなり関心・意欲をもち、積極的に班活動に取り組んだ。	関心・意欲をもち、班活動に取り組んだ。	少しは関心・意欲をもったが、班活動にあまり協力しなかった。	全く関心・意欲を持たず、班活動にも協力しなかった。
2 本文の叙述を大切にしながら脚本化をしましたか。	本文の叙述と丁寧に照らし合わせながら、伝えたいことを明確にして表現にも工夫した。	本文の叙述に即してはいるが、伝えたいことがあまり明確にならなかった。	本文の内容にあまり忠実ではなく、伝えたいことも明確にならなかった。	現代語訳をつなげただけで終わってしまった。
3 脚本化によって自分の読みが深まりましたか。	脚本化するために本文をよく読み、他の人の考え方も聞き、自分の読みが深まった。	脚本化するために本文を読むことで、自分の読みが少しは深まった。	脚本化するために本文の内容を理解するのが精一杯だった。	本文の内容もよくわからずに終わった。
4 実際に語ってみてどうでしたか。	描かれた人物の心情や場面の雰囲気大切に、班で協力し、工夫して語った。	描かれた人物の心情や場面の雰囲気を大切に、班で協力して語った。	場面の雰囲気を考えたが、あまり班活動に協力しなかった。	脚本を読み上げただけで終わってしまった。

* 授業評価シート(例2)

項目	4	3	2	1
A 単元の目標が最初に明示されましたか。	目標について明確な説明があり、学習活動の全体がよく分かった。	目標の説明があり、学習活動の内容は分かった。	目標の説明が不十分で、学習活動の内容があまり分からなかった。	目標について説明のないままこの学習活動に入った。
B 授業の進め方についての指示はどうでしたか。	毎時間ははっきりとした指示があり、分かりやすかった。	毎時間指示があり、大まかな手順は分かった。	指示はあったが、不明瞭な点が多く分かりにくかった。	指示が非常に分かりにくく、授業参加への意欲がわかなかった。
C 今回のような形態の授業はどうでしたか。	作業が多く大変だったが、新鮮で楽しかった。	作業が多く大変だったが、まあまあ楽しかった。	作業に時間がかかり、楽しくなかった。	作業が多く面倒で、何も得るものがなかった。
D 平家琵琶の演奏を聴いてどうでしたか。	直接聞いたのはよい経験であり、作品理解に役立った。	珍しい体験ができ、作品の理解に少しは役立った。	退屈ではなかったが、作品理解には関係なかった。	全く興味がわかず、退屈だった。

(7) 成果と課題

ア 成果

(ア) 生徒の作品への読みが、これまでの単元の学習に比較してより深まった。自己評価シートの「本文の叙述を大切にしながら脚本化しましたか」という項目には91%の生徒が4又は3(3は授業者がおおむね満足できる状態を意味する。具体例については上記参照。)を回答した。「台詞を現代風にするとどのような口調になるのか考えるのが楽しかった」という感想もあった。さらに「脚本化によって自分の読みが深まりましたか」という項目についても82%の生徒が4又は3と答えている。「脚本化によって場面の風景が浮かんでくるようになり、俊寛の悲しみや怒りの気持ちがよく分かった」

というコメントに象徴されるように、生徒たちは脚本化を中心とした学習活動を通じて、作品への理解をより深めたことが分かる。

- (イ) 班活動を取り入れたことで、相互に教え合い、話し合っで作品への理解を深めることができた。
- (ウ) 班ごとの発表の時点で詳細な文法事項の指導にこだわらず、脚本化に際して生徒が各班のプリントを見直すことで、自然に理解を深めることができた。
- (エ) 授業評価については、評価規準の提示によって授業者の求めることが生徒にも明確に伝わり、授業改善に役立てることができた。
- (オ) 検証授業を通して評価シートを改善できた。

イ 課題

- (ア) 脚本作成等の学習活動を行うため単元の総時間数が6時間程度必要である。したがって、年間指導計画における位置付けをより明確にしておくことが重要である。
- (イ) 今回提示した評価シートは一例であり、授業者は授業の目標や生徒の実態に即した明確かつ適切な評価基準を作成する必要がある。
- (ウ) 読書への関心を今後持続させていくためにも、学校図書館の活用等日々の実践を大切にすることが必要である。

V まとめと今後の課題

1 まとめ

- (1) 「話すこと・聞くこと」の領域では、毎時の定型評価（簡便な数値化による評価）、「書くこと」の領域では、アンケートと評価の組み合わせ、「読むこと」の領域では、毎時の定型評価（自由記述を取り入れた評価）によって、生徒も授業者も授業を振り返ることができ、授業改善や評価規準の修正ができた。
- (2) [確かな学力]の育成については、「伝え合う力」の育成を中心として、多様な言語活動の場を設定するとともに、「生徒による授業評価」の導入により生徒の学び方・学ぶ意欲の向上を図ることができた。また、生徒自身が課題の発見と解決に取り組む中で、思考力、判断力、表現力の伸長が見られた。
- (3) 単元ごとに明確な指導目標、評価規準を一体化して作成し、年間指導計画及び評価計画の中に位置付けたことで、それぞれの単元で焦点を絞った指導が可能になった。
- (4) 相手や状況に応じて言葉を選び、読み方や話し方を工夫して的確に伝え合うことを心掛けた。その結果、プレゼンテーションで相手に自分の考えを伝える努力をする生徒、創作における言葉の推敲に努める生徒、脚本の読みにおいて音声表現を工夫する生徒などが多く見られ、「伝え合う力」を向上させようという姿勢が生徒にはっきりと見られるようになった。

2 今後の課題

- (1) 生徒による授業評価シートについては、いろいろな形が考えられ、生徒の実態や授業のねらいに応じて工夫をし、有効な評価シートを作成することが今後の課題である。それにより効果的な授業改善ができる。
- (2) 生徒による授業評価は、授業の在り方だけでなく生徒自身の学習姿勢をも問うものである。[確かな学力]をはぐくむための授業改善を目的とすることを、生徒に十分に理解させる必要がある。
- (3) 生徒による授業評価がよりよい効果を発揮するためには、どの時点で行い、どの形式で行うかなど、総合的に活用し工夫していくことを、指導計画と一体化した評価計画の中で考えていく必要がある。
- (4) 本研究では「国語総合」の年間指導計画の中に位置付けて考察したが、高等学校の入学から卒業までを見据えた上で、国語総合以外の科目においてもより効果的な学習活動を行うことを教育課程全体の中で明確に位置付けていくことが必要である。